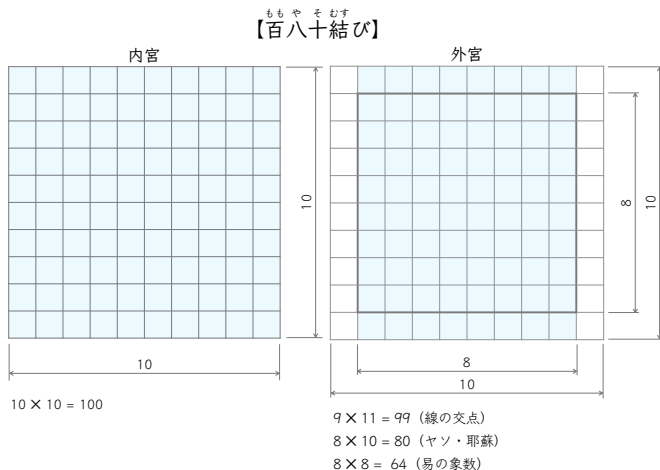


全宇宙の組織の中に 自己の「時・処・位」を確立することが成仏である。

竹内歴史文献には神代の日本に皇祖皇太神宮と別祖大神宮とが有ったと伝えている。現在の伊勢の内宮と外宮の元の形である。皇祖皇太神宮には日本の歴代天皇を祭り、別祖大神宮には世界の五色人の祖先を始めて四方津、^{えだくに}枝国の国王、聖者、予言者の霊を祭り、併せて竜神、天狗神、狐霊等を祭ったとある。竹内文献は神道の原理を直接には伝えず、歴史の筋だけを記してあるから、これを改めて原理の眼を以て読み直さなければならない。

皇祖皇太神宮は本来内宮の五十鈴五十音を祀った注連繩の内、高天原内部の原理である布斗麻邇の宮（^{はんちゆう}範疇）である。別祖大神宮はその注連の外の四方の世界のアオウエである未だ浄化されない部分部分ばらばらの霊を祀る宮である。別祖宮すなわち外宮に霊を祀ると云うことは内宮の五十鈴にその霊を^{まっつ}真釣り合わせる事であって、斯く真釣られる事によってアオウエ各部分の霊の時処位が五十音言霊の上に確定する。この事がその儘にその霊の成仏の所以である。すなわち全宇宙の組織の中に自己の時処位を確立することが成仏である。内宮はイ（イエ）言霊の天津神（高天原）の社であり、外宮は国津神（四方津国）（ウオアエ）の社である。

内宮も外宮も共に同じ五十鈴宮であるのだが、五十音言霊である八咫鏡そのものを祭り掲げたのが内宮である。その八咫鏡の上に諸々の部分的な靈魂を架（懸）けて^{まっつ}真釣り合わせた所、すなわち^{ロゴス}言葉に霊を祭った所が外宮である。仏教的に云うなら完全無欠な仏身の壮嚴である摩尼そのものを示してあるのが内宮であり、その化身を鏡として、阿弥陀如来、觀世音菩薩の活動である^{しやうしゆ}攝取不捨の法門を開いたのが外宮である。内宮と外宮との関係を数理を以てあらわすと図の如くなるであろう。



高天原の天の岩屋の五十鈴宮は既に開かれている。但し表参道の門はまだ開かれない。開かれているのは裏門である。早く気付いて卒先裏木戸を推して生命の宮に入る者は幸である。やがて世界の全人類が表参道にひしめいて開扉を願う時、その時が全世界が^{えら}囃楽ぎ賑わう岩戸神楽の大祭典であるが、これに先んじて裏門から入った者は、岩屋の中で岩戸開きの準備を整えなければならない。榊を樹てて玉と^か幣を架け、御饌御酒を盛り、神與や笛太鼓の用意に忙がしく働かなければならない。この様な祭具物品は象徴咒物であって、その形而上の原理としての実体は言霊、父韻母音子音である。その言霊の準備が全部整った時高天原の表門が開く。

その表門が開く時と全世界が参集する機とは同時である。中に在って準備にいそしむ者は注連繩の内の五十鈴宮を祭る者である。注連繩の内の五十鈴宮を祭る者である。注連繩の外の四方津国（アオウエ）から集って攝取不捨の法門の開闢を待つ者は五十鈴宮に祭られる者達である。祭る主体は人類意志であり、その生命意志の全局（一切種智）であり、世界歴史の必然の歩みであり、所謂神、宇宙である。祭られる客体は個々の人間、民族、国家の自己自身であり、その理念、思想であり、煩惱と^{カルマ}宿業である。前者は禊祓をする者、後者は、禊祓をされる者である。五十鈴宮に祭られた時、初めて自ら五十鈴宮を祭る者となる。黙示録に説かれた十四万四千人の救世者はその中から養成される。（つづく）